

むかし、ある男の人が、山で道に迷ってしまいました。日が暮れてきたのでこまっていると、向こうに明るい大きな家が見えました。男の人は、その家で泊めてもらおうと思つて行ってみました。台所には、おおぜいの女や子どもがいて、がやがやとにぎやかでした。男の人が、

「どうか、ひと晩泊めてください」というと、部屋に通してくれました。やがて、みんながどやどやと家のうらのほうに行く音がしました。

しばらくすると、ふすまが開いて、おばあさんが入つて来ました。そして、

「とつちやま、お久しぶりだなあ。びっくりしないでおくれ。わたしは、あんたのおじいさんに、長年育てられた三毛ねこだ」といいました。

男の人がおどろいていると、おばあさんはいいました。

「ここは、ねこまたといつて、村の余りねこが集まる場所だ。いま、みんなであんたのふとんを取りにいったが、このままここにいと、あいつらに食われてしまう。すぐに逃げるんだよ。この床の間のすみの穴をくぐると、縁の下に出る。門を出れば川があつて、川をわたりさえすれば、ねこは行けないから、もう安心だ。さあ早く行け」

男の人は、おじいさんが三毛ねこを飼つていて、いなくなったことがあつたの思い出しました。

（ああ、このおばあさんはあの三毛ねこなのか）と思つて、男の人は、いわれた通り、床の間の穴から縁の下に出て、門から外へにげしました。

川まで来ると、着物をぬいで頭の上にくくりつけてわたりはじめました。そのとき、うしろから、ニヤゴニヤゴとおおぜいのねこが追いかけてきました。男の人は、おそろしくて、むちゅうで川をわたりました。

ねこたちは、わたることができず、あきらめてもどつていきました。

やがて夜が明けると、男の人は、知らない山の中にいました。やつとのこととて道を見つけて、家に帰つたということです。

おしまい